

テス・ダービフィールドの素朴な信仰

—— キリスト教と異教の混合 ——

菊 地 裕

序

『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the D'urbervilles*) ——人物名とまぎらわしいが以下カギをつけて『テス』と略記——は、14に及ぶトマス・ハーディ(Thomas Hardy)の長篇小説中もっとも多く読まれかつ論ぜられている作品である。これはかならずしも『テス』がハーディの全長篇小説中の最大傑作と見なされているということではない。作品としての完成度という点で『帰郷』(*The Return of the Native*)に第一指を屈する批評家は敗北および日本でも少なくないようである。ただし私見によれば、たとえばシェイクスピアの四大悲劇の中で、あるいはベートーヴェン後期の弦楽四重奏曲五曲の中で、どれが最高傑作かという風にランクづけをすることは、自分の好み(temperament)を披瀝する以外にあまり意義のあることではない。[ライオネル・ジョンソンも似たような見解を示している。彼も『帰郷』をシェイクスピアにおける『リヤ王』(*King Lear*)のごとく第一位と認めながら、他の人が違った決定をする権利にはいささかも干渉していないのはさすがである。筆者のテンパメントからすると、『帰郷』が少し高く買われすぎているようだ。『テス』との比較は機会を見て行なってみたいと思う。] いずれにしても『テス』がハーディのいわゆる六大傑作中一番問題にされる、もっとも特徴的な作品であることは否定できない。現に『テス』を第一に推さないL.ジョンソンにしてから10回くらいは読んでいるという。シェイクスピアの『ハムレット』(*Hamlet*)が作品としてさまざまな不完全さを指摘されながら依然人気の首座をおりないのと似たところがある。しかも作品『ハムレット』への絶大な関心が主人公ハムレット王子の性格的魅力に負うことが多いように、小説『テス』のいまなお衰えぬ声価は主人公として描かれたテスの人物とその周辺にあることも確かである。

『テス』論すなわちテス論となることの少なくない所以である。以下このヘロインの精神構造で重要な位置を占めると考えられる彼女の素朴なしばしば幼稚な信仰——キリスト教的であると異教的であるとを問わず——について考察してゆきたい。本年(1976年)3月の『日本ハーディ協会会報』No. 10には現筆者による「エンジェル・クレアのキリスト教的背景」が掲載されているが、本稿はそれと共軌的な関係に立つものである。

1

テスの信仰態度、という大げさなら「ものの見方」がまずうかがわれるのは、第1部の初めの方で、酔いつぶれた父に代って売物の蜂の巣を持って弟アブラハム(Abraham)と荷馬車で町へ行く途中である。夜空の星をさして「あの星どもはぼくたちの世界と同じようなの」と尋ねる弟のことはほぼ肯定して「うちのリンゴの木になる実のような気がするよ。たいていは出来がいいけど虫の食ったの(blighted)もあるわ」と答え、続く弟の問いに対して、われわれの住んでいる世界は虫の食った世界で、それだから父母が苦勞のしどおしだという箇所である。これは「印象を述べるときはじつにすばらしいが、議論をしだすと一番弱点を露呈する」とハーディを評したヴァージニア・ウルフが「血と肉を備えた人間しか見えなかった場面に機械のパネのように冷たく侵入している」と批判している箇所である。ハーディのメリットを十分認めている女流小説家兼批評家のことばであるが、筆者としてはそのような異和感は抱かせられず、むしろあの場面に適切だと思える。さてここでのテスの発言は異教的、L. ジョンソンの用語を借りるまでもなく、「ダービフィールド家の迷信的信仰」の現われと取られても仕方があるまい。英国教会に所属して日曜ごとに礼拝を守り、村の娘たち同様聖書や祈祷書に親しんでいたとしても、貧しい子沢山の行商人の長女で小学校卒業だけの学歴しかない16歳の少女に神学的適確さを求めても無理であろう。しかし人間の罪のため全宇宙は虚無の状態に置かれていると新約聖書ロマ書8章中段の箇所は説いており、それがおぼろ気ながらテス発想の下敷きとなっていたと考えられないことはない。そうすると、彼女の信仰路線も存外的をはずしていないように思われてくる。〔この聖句については本稿の最終節で改めて詳述する。〕少なくとも『運勢全書』を開いて占い、娘が出世すると判断して喜ぶ母親の迷信とは雲泥の差がある。

父の代役としての不慣れな手網取りとしばしの間の不注意の結果、荷馬車が衝突して馬プリンス (Prince) が死んだあと、ほかの家族は別にテスをとがめていないのに、彼女の顔は自分がまるで「殺人者」であるとも思っているかのように乾いて青ざめていた。この 'murderess' は虫や鳥獣ではなく人間を、多くの場合意図的に、殺害した犯人 (女性) をさすので、作者がここで使用したのは、テスの抱く罪責感の深いことを表わしたかったからであろうが、原作第 56 章でのテスのアレック (Alece) 殺害を予告するごとくきわめて効果的であると思う。

2

テスの素朴なもしくは原始的な信仰姿勢がづぎに示されるのは第 2 部の初め、もはや処女でなくなった彼女がアレックのもとを逃れてわが家から程遠からぬ所まで来たとき、赤ペンキで伝道用の聖句を書きつけている男と出会う場面である。最初に書かれたペテロ後書 2 章 3 節の句は、本来信徒をまどわす偽預言者、偽教師のやがて受くべき罰としての滅びに言及したものであるが、ここでは「汝の滅びは寝ねず」と二人称単数に変えられていたため、テスは自分がつい先日犯したあやまち——罪——をこの職人風の男が知っていて叱責しているような気がしたのである。自分の罪が、自ら好んで犯したものでなくともこの聖句は信ぜられるのかと男に尋ね、さらに第二の聖句、モーセの十戒中姦淫 (adultery) を禁じた第七戒が途中まで書かれるとサッと顔を赤くし、そして歩き去りながら「神さまがそんなことおっしゃったとは思えないわ」と呟くのである。古代ユダヤの律法では、死をもって罰せられた姦淫は夫ある妻が他の男性と情交を行なった場合と解釈され、未婚の女性では、婚約者が定められているにもかかわらず他の男性と関係した場合にのみ罪名が適用されていたから、¹⁰⁾ 理窟からいえばテスには当てはまらないことになる。彼女は少しきびしく考えすぎたようであるが、保守性の多分に残っていた当時の英国女性にはこうした倫理感が植えつけられていたとも考えられる。〔三つの出版社から拒否された『テス』をやっと連載することを承諾した『グラフィック誌』(Graphic) が、第 23 章でトールボセーズ酪農場 (Talbothays Dairyfarm) で働く四人の若い女性——テスを含む——が日曜日に教会へ行く途中深い水溜りにぶつかって困っているところを同じ農場で働いている青年エンジェル (Angel) がひとりづつだきあげて向う側に運んでくれるという楽しい物語りも、家庭で読ませるに

はふさわしくないと異議を唱えたくらい、お上品さ (decorum) が必要以上に強調され、道徳性の有無——ことに因習的な——がじきに問題となったヴィクトリア朝時代である。」] テスならずともこのような状況下に置かれたならば、上述のように言動しただろうと見るべきか、それともハーディがとくに罪に敏感な女性としてテスを創造したのか、答えはしばらく保留しておく。

3

テスのナイーブな信心は、処女喪失という大きな傷を負って帰宅してから二、三週間たったある日曜日の朝教区の教会へ礼拝を守りに行ったことから察知できる。しかし会衆が彼女の姿に気づいてから互いにささやき合うのを聞いてがっかりし、もう教会へは来られないと思う。(教会信徒のとりすました偽善ぶりが風刺されている。) それだけではなく、自然現象までが、雨も風も、自分の「弱さ」を責めあるいは嘆いているようだった。それが「幼少の時から信じている神とはっきりいえないが、といってほかの存在とも考えられない漠然たる倫理的存在の意志表示」と受取られ、「無罪者の出入する箇所¹⁰に侵した罪ある者の姿と自らを見た」と彼女なりの罪感の強さを示している。

第2部の終わりごろで注目に値するのは、これまた物議をかもした第14章の「深夜の洗礼」の部分である。アレックスとの間に出来た幼児ソロー (Sorrow) の臨終に牧師職でない少女テスが洗礼を施すなどは、当時の教会——ことに儀式面にやかましい英国教会——にとっては途方もないことにとられたに違いない。しかし母親としてのテスは、わが子が洗礼を受けずに死んだ場合地獄のどん底でひどい目に会うさまを想像していても立ってもいられなかった。三叉のホコで魔王がわが子を苦しめているのはダンテの『神曲』 (Dante Alighieri, *La Divina Comedia*) の「地獄篇」に描かれている光景で、ハーディが『教理問答書』 (Catechism) と混同した結果であろう。テスがこんなことまで知っていたとするのはどうも納得できないとオリファント夫人はいつているが、キリスト教は信じなくとも神の存在を否定する勇氣は持たない人々にとってこうしたテスの心配は幼稚至極ときめつけられるであろうか。まして続く彼女の祈りの叫び「神さま、私めの上にどれだけあなたのお怒りを積まれてもけっこうです。ただ子供はあわれんでください」から自ら洗礼を授けるまでの叙述は胸を打つものがある。〔聖書神学的にいても、洗礼を施すのは父と子と聖霊の名によってするかぎり、教職者でなくとも差支えないはずである。〕 同胞ユダ

ヤ人の逸脱を悲しみ彼らが救いに洩れることを憂い「もしわが兄弟わが骨肉のためならんには、われみづから呪われてキリストに捨てらるるもまた願うところなり」と叫んだ使徒パウロの兄弟愛をさえ想起せずにはおられない。これを書いたハーディは当時の英国社会のコンヴェンショナリズムに一矢放ったと見て良いであろう。

4

第3部「回復」は全巻中もっとも牧歌的美しさとみずみずしさに富んだ部分であるが、その最初の章には、新しい働き場となるトールボセーズ酪農場とその周辺が、再出発を目前とする20歳となったテスの目に、どう映じたかを宗教的的角度からかなりこまかく描いている。この地域を流れるフルーム川(The From)は「エヴァンジェリスト(ヨハネ)に示された清き生命の川のように澄んでいた」と記されてある。聖書66巻をしめくくる「ヨハネ黙示録」最終第22章劈頭の聖句、世の終わりの大審判後の新天新地の叙述でたとえられたところは、これから住込んで働く新しい土地に対してテスの抱いていた並々ならぬ希求と期待がうかがわれる。テスはテスで「風がそよ吹くたびに心地良い声を聞き鳥のさえずるごとに喜びの潜むのを感じ」、気魄、感謝の念、希望は上昇して日頃親しんでいる『祈禱書』からの讃歌を歌う。だが不意に中止して「でも私にはまだ主(なる神)がわかっていないのかも知れない」と呟くのである。作者ハーディも登場してきて、こうした神への讃歌も「フェティシズムの現われ」であり、彼女の心中には「異教徒的幻想」が多分に含まれているのだと一席ぶつのである。

原作の三分の一をやっと越えたこの辺で立ちどまってみると、7部59章から成る全巻を通じてうかがえるヒロインの信仰の様相には、(A)素朴な、ときに幼稚と見えるキリスト教的な面と、(B)汎神論、呪物崇拜、多神教等名称はさまざまでも、要するにキリスト教およびその母胎たるユダヤ教と異質であるという意味での異教的な面との二者が混合しており、前者が後者によって影を薄くされて見える場合も珍しくない。そして両者とくに(B)の場合、(1)ことがらだけを客観的に描いて異教的との判断は読者に委ねてある箇所、(2)テス自身が自らを異教的だと認めている場合、(3)エンジェルその他の作中人物がそう判断している場合、そして(4)作者ハーディが注釈めいた言及をしている箇所とあるようだ。すでに取扱った引例いくつかは以上のカテゴリーのどれかひとつ、もしくはふ

たつを合わせたものに該当することは容易にわかるであろう。テスが搾孔場に
住込んで働きだしてから四、五日たって、親方クリック (Crick) や同輩たち
と朝食のテーブルについたとき、「私たちの魂は私たちが生きているあいだに
からだから離れて (何百マイルも) よそへ行くようにすることができますよ」
と珍説を吐き、しばらくしてからおかしなことをいったと顔を赤くしてあれば
「気まぐれな考え」 (fancy) だったというところがあるが、これなど (b) の (1) と
(2) の併合であろう。厄介なのは (A) か (b) かの判別がぐだしにくいケースである。
たとえば本稿第 1 節にあげたテスの世界観はキリスト教的か異教的なのか、お
そらく批評家のキリスト教観によって異なるであろう。これは何もテスのよう
なフィクション中の人物にかぎらず、実在した文学者、思想家——トマス・カ
ーライルや D. H. ロレンス等のごとく——についてもしばしば起こることで、
ある人物がマルキシストであったかなかったかの判別のようににはゆかない性質
のものであろう。

トーボセーズでエンジェル (Angel) と語り合うようになって間もなく、「な
ぜ太陽が正しい人の上にも正しくない人の上にも同じように照るのか知りたい、
でも本にも書いてないんです」と少し声をふるわせていい、「そんなえげつな
いことを」とエンジェルにたしなめられるくだりがある。このパッセージから、
主なる神に不平をいうようではキリスト教徒として失格だと判定したとすれば、
その方がむしろ問題である。神への不平というのは旧約聖書の「ヨブ記」など
の例でもわかるように、一見不信仰不敬虔でじつは神への「ひよう依」の強さ
を示すものであることが多い。あとになってふたりの親しさが増してきたとき
でも、エンジェルの中には、テスの雑駁な信仰——幼時に注入されたいし
——は用語的にはトラクト派であっても本質的には汎神論的だと映ったのも無
理はない。しかし彼女の信仰姿勢を異教的と批判したこの牧師の息子が、しだ
いにわかってくるように、信仰の本源的な点でははずれており、いなか娘テス
の足下にも及ばなかったのである。〔序論であげた拙稿「エンジェル・クレア
のキリスト教的背景」を参照されたい。〕

少し前に戻ってトールボセーズ住込みから二か月後の日曜日の朝、同僚の女
性たちと教会へ向かう途中、仕事着にブーツというおよそ教会行きにふさわし
くない服装のエンジェルに出っくわして、「あの人礼拝に行くんじゃないわね」
との仲間のことばに、「そうね—— あの人礼拝に行ってくれるといいんだけど」
とテスの呟くところがある。作者はしばしば行なうように——それがまた

読者に抵抗を感じさせることの多い点だが——暗れた夏の日にはエンジェルには教会堂内の説教より自然の中に含まれた説教の方が良かったのだと注解じみたものをつけている。テスとエンジェルの信仰姿勢の対比が、ナレーターとしてのハーディのその起伏消長とある程度までパラレルにされているのではないだろうか。

5

4年前の処女喪失のため、しかもそれを口にすることができなかったため、エンジェルの熱烈な求婚をことわりきれずついに承諾するに至ったテスは、大晦日に教会堂で式を挙げて戻って来ると、ただひとり部屋にはいって悔恨にさいなまれる。「ひざまづいて祈った。彼女は神に祈ろうとしたのだが、現実には彼女の祈ったのはエンジェルに向かってであった」異教的といわばいい、テスのこの困迷を非難することがだれにできよう。しかもそれから間もなく新婚第一夜をすごすべき旧領主邸で、かつての俸孔の同輩たちが自分とエンジェルの結婚ゆえに自暴自棄となったみじめな成行きを聞くと、償いもせず漫然としているのは罪悪であると考え、いまこそこの場で告白しよう、最後の一厘まで支払おうと決意するのである。これより先きテスが受取った母の手紙には、上流婦人で婚前に男性関係でトラブルを起こした人も少なくないがわざわざ自分から吹聴していない。お前もこの出来ごとは絶対にいうのではないよと固く警告していたのだが、テスの罪障感は愚直にもこの「生活の智恵」を受け入れなかったのである。「最後の一厘まで云々」はマタイ伝5章26節の引用であるが、この同じ聖句を、処女を奪われてトラントリッジ (Trantridge) を立ち去るテスに追いついたアレック (Alec) も使ってどんな償いもするといっているのは面白いコントラストである。[アレックは物質面ではともかく言明どおり償いを実行した。テスの償いは物質、精神、肉体のすべてにわたって行なわれた点が大きな開きを見せている。] テスの告白終了に幕をあけた第5部「女は償う」の初めの3章はテスとエンジェルのやりとりの連続で息づまるものがあるが、描かれたテスのすべて——ことば、そぶり、動作そして気持ち——は読みかえずごとに興味を増してくる。テスあっての『テス』だと思わせる所以である。「あなたを許してあげたように私も許してください」と嘆願するだけでなく、いわない方が良かったと思われる「あの事件のとき私はまだ子供だったのです」に始まって「母の話では私よりもっとひどい例がいくつかありましたけれども、

夫になっ人はあまり問題にせず——少なくともそれを乗り越えたそうです²⁵⁾」に至る発言、さらに気まずい二日目も暮れようとするときの涙ながらのアピール「私は尊敬に値するような (respectable) 女でないとずっと以前からあなたにいつたでしよう。それだから私はあなたと結婚したくはなかった——ただあなたがぜひしろといったのです²⁶⁾」あたりだけから判断すると、テスは無知にもとずく身勝手な自己弁護をしていると取れないこともない。しかし彼女は知識と智恵には乏しかったかも知れぬが、エゴイスティックであると刻印を押すのは酷であろう。上述の場面で作著もテスが「世なれた女」だったら男の同情心をかき立ててヨリを戻し得たかも知れないがテスにはそれができなかったといっている。いよいよふたりが別れる間際でも、テスがもっとオーヴァーなジェスチャーをしたならば相手を動かす公算は大であったと似たようなことを述べている。最初の場合、「テスは、すべてを自分の当然の報いとして甘受した」とハーディは記し、「(エンジェルのいかなる出方に対しても) 自己の利を求めず、非礼を行わず、憤らず……」とコリント前書 13 章の「愛の讃歌」を引用して、いまや私利追求の近代社会に使徒的愛が戻ってきた姿かと見えたときまで賞めている。作者の皮肉も込められているのだろうか。最後の離別の場合でも彼女の寛容 (long-suffering) —— コリント前書 13 章 4 節に使われたことば——は、エンジェルの予定遂行を容易ならしめたのである。

もうひとつテスの愛——思いやり——の発露に目をとめてみたい。別れる前の夜おそくエンジェルが夢遊病の発作でテスをかかえて外出する有名な場面である。翌朝食卓でテスはよほどこの出来ごとを話そうかと思う。しかし「冷静に考えたら承認できない愛情の表示を衝動的にせよ夢の中で呟いたことを知ったら気を悪くし、悲観するだろう……酒に酔ってした脱線行為をシラフのときあざ笑うようなもの」²⁸⁾と思えてやめたのであった。〔旧約聖書創世記 9 章 18—57 節で、大洪水に生きのびることを許された唯一のファミリーの長ノアがぶどう酒で酔いつぶれて裸で寝こんでしまったのを、仲兄を除く兄弟ふたりが上衣を父のからだにかけ裸を見ないようにした記事が連想される。〕ずっとあとで、アレック殺害後、ふたりでの最後の数日を暮らしたとき、エンジェルはテスから初めて聞いて驚き悔やむ²⁹⁾があとの祭りであった。

テスの苦労は続く。突如としてファナティックな伝道者となったアレックに

呼びかけられた彼女は、「あなたよりりっぱな方が信じていないから、あなたの回心 (conversion) や妄想的宗教は信じられません³⁰⁾」という。筆者のいわゆる「新キリスト教」にかぶれたエンジェルの影響をかなり受けたと自認して、使徒信条の無条件承認、信仰義認一点張りのアレック路線についてゆけなくなったのも無理はない。それでいて少したつとテスの心の中には以前からたびたび襲ったことのある「あのみじめな思い」——自然が授けてくれた肉の幕屋におるかぎり自分は何かしら悪いことをしているのだという——がよみがえってきた。人間と生まれているからには罪性を脱却することはできないというキリスト教の中核教義が、知的には一応排除されているようでいて、皮膚感覚的にはネッサスのシャツのごとくびたりと肌に付着して、脱ごうにも脱げない、そういう状況にあるとハーディは、深く意識しなかったにせよ、書いた、いな書かざるを得なかったのではあるまいか。〔作者自身におけるキリスト教的な面と非キリスト教的面との交替あるいは共存がある程度反映していると見られないこともあるまい。〕

もうひとつ例を挙げると、「きみは信仰を持っていないようだ」とアレックにいわれて「いいえ持っています。もっとも超自然的なことはいっさい信じませんけれども」と答え、「山上の説教」の精神は信じています。夫もそうでした。でも……」と応酬するテスである。しかしテスが超自然的、来世の面を完全に否定していたとは断言できない。その論及はテス自身の最期が近づいたときの場面に譲る。

テスの対神的姿勢には若干疑問がなかったとはいえぬ。しかしその対人態度——神の命ずる道徳律の第二範疇——においては、隣人愛の形でこれ以上注文のつけようない段階にまで達していた。

エンジェルに去られフリントコーム・アッシュ (Flintcomb-Ash) で辛い労働をするようになってからも恨みごとをいわない。きみにこんなことをさせる夫は薄情だとアレックがなじっても、それはすべて自分で考えてやったことだとエンジェルをディフェンドする。少しのスタンドプレーも認められない天真らんまんさの現れである。

「憤らず、人の悪を思わず」(コリント前書13章)、テスの愛の精神は、ブラジルへ渡ったエンジェルへの第一信に遺憾なく現わされている。男の仕打ちを恨んでいない。私に対してあなたが怒るのは「当然であり正しい」だが「もう少し親切になってください」と嘆願する。「結婚して以来〔身体的には何

ら結ばれていないふたりだったが結婚したとテスはいうのである] すべての思いと外縁においてあなたに忠実であることがいつも私の「生活信条」(religion)でしたので、気のつかぬうちにだれかにお世辞をいわれたりすると、あなたに罪を犯している気がするのです」とわざわざ‘religion’³⁶⁾という単語を使っている。テスにとってエンジェルへの崇敬と信頼なくして神信心はあり得なかったに違いない。何とかして帰って来てほしい、さもなければ私をあなたのもとへ行かせてほしい、と切々たる訴えを書きつづけたテスは終わり近くで、「もしあなたの妻として許されないのなら、召使いとしてでもいいからそばにいてくだされば満足、いえ感謝です」とまでいう。新約聖書ルカ伝にあるイエスのたとえ話——放蕩息子がわれにかえって父のもとに帰り、「あなたの子と呼ばれるにはふさわしくありません。召使いのひとりのように扱ってください」という³⁷⁾——を思いだす。聖書のたとえでは、あれほど勝手気ままをしつづけたどら息子³⁸⁾を父は進んで許したばかりか大歓迎をしている。ハーディの『テス』では、同情すべき点の多い、しかもこれほど真情を吐露した主人公の懇願に対してもエンジェルは迎えに来てくれなかった(あまりにもおそすぎる時まで)。やがて働き場フリントコーム・アッシュでの契約期間も切れ、父の死にともなうマールロット村(Marlott)から一家の立ちのき——それもテスの出戻りの悪評がかなり作用している——という窮地に追いつめられて、テスもさすがにエンジェルをうらめしく思って最初にして最後の怒りの手紙をぶつける。「エンジェル、なんでこんなひどい仕打ちをするんです、私が受けなくてもいい虐待を。……絶対に、絶対にあなたを許せません。……」³⁹⁾その夜、立ちのきを前にして住みなれた家にいることのできる最後の晩、幼い弟妹の斉唱する日曜学校の讃美歌を聴いても、テスは弟妹を神——摂理(providence)の主体としての——と未来の天国に任せておく気にはなれない。自分がかわりに幼い者たちのプロヴィデンスになってやらなければと痛感する。

7

終局第6部でテスはずいにアレックを殺す。テスに同情してみても殺害とは大変なことをしたものである。テスの告白を聞いてエンジェルが感じたように、彼に対するテスの愛情には強さと同時に異常なものがあり、したがって自分の犯した行為の重大性を悟らずにやっとかち得た満足に喜んでいたのであったろう。しかしそれからニュー・フォレスト(New Forest)の空家の貸別荘で、

エンジェルとこの世で最初にして最後の、短いしかし幸福な同棲生活を五日間送ったあとは、テスの気持ちも落ち着き、国外へ脱出しようという夫の提案も公算なしと考える判断力を持ち、アレック殺しについても「何と悪く気が狂ったものでしょう」と反省する余裕を見せている。⁴⁰⁾

アレック殺害の直後にもう一度戻ろう。エンジェルに対して相手のこれまでの無反応、薄情さを列挙はしたが、「でもあなたが悪いとは申しません。私がアレックを殺したいま、エンジェル、あなたに対する私の罪を許してくださいませんか」と相手をとがめず、なお相手の許しを乞うている。⁴¹⁾アレック殺害の当否についての判断の欠如（少なくともこの時点における）は認めざるを得ないとしても、対エンジェルのこの発言に関するかぎり、ハーディ自身のいう使徒的愛と寛容（既出）において後者のとうてい及ぶべからざる高さに達している。貸別荘を出てさらに北上したふたりは、やがて先史時代の異教徒の寺院遺跡のあるストーンヘンジ（Stonehenge）に着く。ふたりが地上で一緒におられる最後の地点でのテスの発することばのひとつひとつは、大悲劇の最終幕最終場面にふさわしく、きわめて印象的である。「最終章は無言劇である。」信仰的な面に焦点を絞って眺めてみる。

「ツールボセーズにいたとき、きみは異教徒だってよくおっしゃったわね。だからいまでもアット・ホームだわ」⁴²⁾と愛人のかつての評言を肯定するテスである。そして自分が死んだら——彼女は死刑を予想している——妹ライザ・ルー（'Liza-Lu）と結婚してくれと頼む。そして自分たちが霊になったとき妹とあなたを共有（共愛？）できたら喜んでしたいものだとかやや奇抜な願望を表わすが、「妹は私の悪いところは持たず私の一番良いところだけ持っています。もし妹があなたのものになったら死も私たちを隔ててしまったとは思えなくなるでしょう」と愛情の美しさを示す。そして次のようにパセティックな終わり方をしている。

「結婚する前あなたは一度も私の信仰に干渉さななかったわね。でもあなたの考えがわかっていたので、あなたの信ずるように信じました——別に私としての理由からでなく、あなたがそう考えたから私もそうしたのです。ねえエンジェル、私たち死んでからまた会えると思う。いってほしいわ」

彼は答えを避ける意味で彼女に接吻した。

「ああエンジェル——だめだっていう意味なのね」彼女はすすり泣きを堪

えていった。「もう一度あの世であなたいに会いたいと思っていたの——ほんとうに、ほんとうに。エンジェル、あなたと私、こんなに愛し合っているふたりでも会えないなんて」⁴³⁾

最終場面でのテスの発言は、彼女自身もある程度認めているように異教的と見られないこともない。しかし「死後の再会」ということに関しては、新約聖書に直接の言及はないとしても、キリストの再臨に際した信者はからだのよみがえりを許されキリストを中心とする交わりの世界に永住することはさまざまな箇所ですべられてあるから、少なくとも信徒同志の再会は暗示されていると考えられる。テスのことばは主キリストに触れずに人間同志の来世での交わりにウエイトを置いているため異教的とも取られやすいが、そうかといってキリスト教的でないともいいきことはできない。一口にキリスト教といっても、聖書の一語一句を文字どおりに受取る超保守派——エンジェルの父クレア牧師 (Parson Clare) のごとく——から愛と清潔の倫理で動いておれば教義などどうでも良いとする自由派——エンジェルのごとく——までそのレンジはずいぶん広い。来世や終末についてほとんど考えない派もかなりある。ある人がキリスト教徒であるかないかをきっぱりいうことは前にも述べたが容易でない場合が少なくないのである。

8

完本として1861年に世に出るまで迂余曲折を経た『テス』は出版後賛否両論の渦に巻き込まれたが、主人公テスの人物、行動に関してもさまざまな批評があげせかけられた。同情的な論評もあった一面、著者のつけたサブタイトル『純潔な女』(A Pure Woman) をヒロインに適用するのはおかしい、ことにテスが最初アレックに誘いかされた経過については不可抗力とは認められないと難詰するものもかなりあったようだ。〔既述のオリファント夫人は、同じ論文内で、原作の9、10、11の3章を資料として、すでにアレックに対して十分警戒心を抱いていた彼女が、たかが酔ってからんだだけの女たちを避けてわざわざ好色漢の馬に一緒に乗るなどはどうにも合点がゆかないと評述している。⁴⁴⁾ 作家ヘーリー・ジェイムズ (Henry James) は1893年スティーヴンソン (R. L. Stevenson) に宛てた手紙の中で、「テスは低劣な女だ。(She is vile.)」ときめつけている。⁴⁵⁾ 今世紀にはいつてからもハーディおよび作中人物の倫理面へ

の攻撃はなくなったわけではなく。ジョージ・エリオットびいきのリーナ・ライト・バーリーも、『「ビュー・ア・ウーマン」の題づけはリハビリテーションの行為で、そうすること自体道徳的性質の弛緩を示している」その他酷評をくだしている。〔テス論のほとんどがアレックによる処女喪失を「誘惑」(seduction)——「和姦」(fornication)を暗示している——の結果としている。「強姦」(rape)の形を取った醜いものと記したのは筆者の知るかぎりジョージ・ウィングのみである。D. ロッジのごときは「彼女は誘惑されたので強姦されたのでないことを認識することが大切だ⁴⁶⁾」といっている。〕今世紀も三分の一をすぎて刊行された W. ラットランドのものは、さすがに前世紀末の評者のように頑固なところは見せていないが、原作の終わり近くで、たとえ家族を助けるためであっても、アレックになびいたことだけは全面的に納得するわけにはゆかない(not wholly convincing⁴⁷⁾)といっている。

二十世紀も後半になると『テス』に対し理解ある論評がふえてきた。それはかならずしも『テス』およびテスへのひいきからではなく、二度目の大戦による荒廃と惨禍を味わい、思想・信仰の動揺によって従前の視野の狭さと考察の薄さを克服した批評家の自己表現にほかならなかった。ラ・ヴァレリー編の評論集『「ダーバヴィル家のテス」の二十世紀的解釈』に含まれた数篇が、申し合わせたようにこの大作ならびにヒロインに高い評価少なくとも好意を寄せているのはその一例である。そのひとりアーヴィン・ハウは、「テスは要するに新約聖書の純潔な、そして人を純化する精神で考えられた人間の可能性の偉大なイメージのひとつである。不可知論者ハーディほど完全なキリスト教的心情を記した者は、自他ともに許すキリスト者の中でもきわめてまれである⁵¹⁾」と賞揚し、1974年に刊行が開始されたハーディ作品のニュー・ウェセックス版の編集主幹ファーバンクも、「テスはヴィクトリア朝時代のパリサイ人的擬似キリスト教に対して真の純潔と真のパウロ的キリスト教を体現している⁵²⁾」とまでいいきっている。文字どおり隔世の感があるテス評価である。筆者は前世紀末から今世紀初期にかけての『テス』酷評そしてテス非難は当を得ていないと考える者であり、また自分のテンパラメントからいえば、ハーディ長篇中『テス』を首座にすえたく、信徒のひとりとしての筆者のキリスト教観からいっても、これらハウやファーバンクの所論はわが意を得たりと歓迎したいところである。ただこうした直線下向型の賛辞には無条件でついてゆけない面がある。その点に留意しつつ、既述の拙論を復習かつ補足することによって筆者なりに

まとめてみたい。

9

本稿第4、第5節の繰返しになるが、テスの信仰はキリスト教と異教とのブレンド、もしくはキリスト教の下地に異教の粉末がところどころ付着したようなものであったろう。どのようなキリスト者でも、その信仰が常に純正で夾雑物を少しも含まぬということとはあり得ない。信仰の流れがとどこおり濁ったりすることは決して珍らしくない。この意味でテスの人物は低次元、信仰は迷信的ときめつけるのが誤っていると同時に、逆にテスをキリスト教的人間の理想型と見なすことも脱「律法主義」のようで新たな律法主義におちいる危険がないとはいわれない。キリスト教的人間像の設定ということがどだい無理なことであろう。

テスがわれわれの住むこの世界を——ひいては神を——どう見ているかがうかがわれる箇所は、(1)この世を「虫の食ったリンゴのような世界」というところ(本稿第1節の初め)と、(2)太陽が善人にも悪人にも同じように照る理由がわからないという場面(第4節既出)のほかに、(3)一家が立ちのいた晩、地下納骨所で執念深くアレックにつきまとわれたテスが、相手がすてぜりふを残して立ち去ると、その入口にうずくまって「なぜ私はこの扉の向い側にいるのだろう[＝この世に生きているのだろうか]」と呟くところがある⁵³⁾。テスは決して今のこの世を楽土とは見ていない。キリスト教もそのとおりで、各自の努力によって世界がしだいに改良されて理想郷が実現するとはいっていない。第1節で触れたロマ書の箇所は、1970年完成の *New English Bible* の英文が現代人の感覚にマッチしていると思われるのではなるべく忠実に訳出してある。

というのは創造された宇宙は神の子たちが表わされる (revealed) のを切実に待ち望んでいる。宇宙が挫折 (frustration) のぎせいになったのは、自分から好んでなったのではなく、神によってそうさせられたからである。しかしなお宇宙自身にも死のしこくから解放されて神の子たちの自由と栄光に加わる望みが残されている。今に至るまで創造された宇宙全体は陣痛のように至る所でうめいているのである。(ロマ書8章20—22節)

上述の世界観に立つかぎり、聖書を中心とするキリスト教は現世に関してオ

プティミスティックにはなり得ない。『テス』の主人公もこの世に住むことの結果として避けられないみじめさを彼女なりの素朴な形で悟っていたと思われる。用例 (1) やモーセの第七戒の含む理不尽さについての嘆き (第2節既出), あるいは弟妹を摂理にまかせてはおけないと感ずるところ (第6節の末) など, この気持ちの直接間接の現われと見られなくはない。だからといってテスはその結果自暴自棄になったり, いたづらにペシミスティックになって拱手呆然とはしていない。隣人愛——神信仰とならぶ信徒の道徳律——の実行において, 薄情な夫エンジェルに対してはもとより, 父, 母, 弟, 妹, そして作業場での同僚に至るまで, テスは裏切られ, また不注意のためあやまちを犯しながらも, 最後まで, 死を予定する就縛の直前まで倦むことがなかった。

テスの姿勢で注目していいことがひとつある。アレックにによる誘惑について母やエンジェルにいいわけをすることはあっても, 罪責感は終始去らなかつたテスであったが, 同時に非処女としてトラントリッジから帰宅後一家の生計を助けるため野良に働きに出るテスは, 「何かの気魄に動かされて」以前と同じ服装で, 私生児をだきかかえているときでも落着いて周囲の人々を眺め, あなどるべからざる品位 (dignity) をもって行動する面を備えていた。⁵⁴⁾

対エンジェルの場合にも似たようなことを見いだす。過去のあやまち告白後夫に拒否されたテスは, 自分の出方によっては相手の心情を動かし得たかも知れないのにあえてしなかつたと二度も記されている (第5節既出)。いずれも夫への服従の現われであるが, 第二の場合プライドも作用していたと書かれている。(そしてことによるとダーバヴィル家伝来の気質かも知れないと著者はなくもがなの感じのする注をつけている。) 彼と別れて暮らすうち生活に困るようになって, テスはエンジェルの父に物的援助は一度も頼んだことがなかった。(実らなかつた牧師館訪問は金のためでなく, 音さたのないエンジェルについての消息を聞くためであった。) テスのプライドが邪魔して踏みきれなかつたのだとブラジルからおそすぎて帰国したエンジェルが初めて悟るのである。⁵⁵⁾

プライドとディグニティ, この基調を失わずに動いたテスの姿は, 外界の苛酷さと彼女自身の成行きの一見悲惨さともにかかわらず, ふしぎと陰湿な印象を与えない。むしろ一種の明るさを感じさせることのあるのは何故であろうか。教育程度も低く, あまりワイズとはいえない彼女であるが, 他者の思想に左右されず, 自分の目で眺め自分の生の運びとして, 自分の足で歩いたからである。

J. R. ブルックスは最近『「テス」の中にはサルトルやカミュによって普及した⁵⁰⁾実存主義思想の風土の中で書かれた二十世紀の小説を指向している要素がある』という見解を展開している。ハーディと実存主義との関係はゆっくり取り組むまでに至っていないが、とにかくテスの動きには実存的なものがあったといえるというのにとどめておこう。ただし筆者のいうテスの実存性は福音主義的キリスト教——たとえ異教的夾雑物にしばしばくもらされても——を中核としており、それ故に罪意識がありながらペシミストにも運命論者にもならなかったと考えるのである。

(付 記) 1975年10月4日の日本ハーディ協会第18回大会で「テス・ダービィルドの素朴なキリスト教信仰」と題して口頭発表を行なったが、その後資料的増強と視野の拡大もあって、今回のごとくかなり“extend”されたものとなった。

注

- 1) Lionel Johnson, *The Art of Thomas Hardy* (London: John Lane, 1894), p. 45f.
- 2) L. Johnson, p. 245.
- 3) *Tess of the D'Urbervilles* (New Wessex Edition, Macmillan, London. 1974) iv. 59. 以下 TD と略し、章とページ番号を併記する。
- 4) Virginia Woolf, *The Common Reader*, (London, The Hogarth Press, 1968), 11, 255.
- 5) L. Johnson, p. 189.
- 6) TD, xiv. 128.
- 7) TD, iv. 55.
- 8) TD, v. 63.
- 9) TD, xii. 115.
- 10) 旧約聖書申命記 22 章 23—27 節。
- 11) TD, xiii. 121.
- 12) Mrs. Oliphant, *Thomas Hardy: The Critical Heritage*, (ed. R. G. Cox, London, 1970) p. 208 f.
- 13) ロマ書 9 章 3 節。
- 14) 15) TD, xvi. 140 f.
- 16) TD, xviii. 158.
- 17) TD, xix. 165. マタイ伝福音書 5 章 45 節の自由な引用。
- 18) TD, xxvii. 213.
- 19) TD, xxiii. 183.
- 20) TD, xxxiii. 256.
- 21) TD, xxxiv. 266.
- 22) TD, xxxi. 233.

- 23) *TD*, xii. 112.
- 24) *TD*, xxxv. 271.
- 25) *TD*, xxxv. 274 f.
- 26) *TD*, xxxvi. 284.
- 27) *TD*, xxxvii. 297.
- 28) *TD*, xxxvii. 294.
- 29) *TD*, lviii. 441.
- 30) *TD*, xlv. 356.
- 31) 菊地裕「エンジェル・クレアのキリスト教的背景」(『日本ハーディ協会会報』 No. 10, 1976), p. 43.
- 32) *TD*, xlvii. 357.
- 33) *TD*, xlvi. 368.
- 34) *TD*, xlvi. 365.
- 35) *TD*, xlviii. 384. 'religion' には「神に対する信仰」だけでなく、「そういう信仰の結果としての、個人または社会に現われる、生活一般における精神的倫理的態度」という意味のあることが OED その他に記されている。
- 36) *TD*, xlviii. 383 ff.
- 37) ルカ伝福音書 15 章 11—32 節、とくに 17—21 節。
- 38), 39) *TD*, li. 495 f.
- 40) *TD*, lviii. 442.
- 41) *TD*, lvii. 436.
- 42), 43) *TD*, lviii. 445f.
- 44) *The Critical Heritage*, p. 206.
- 45) *ibid.*, p. 193.
- 46) Lina Wright Berle, *George Eliot and Thomas Hardy: A Contrast* (New York, Mitchell Kennerley, 1917), p. 50. この女性評論家については拙稿 “A Defence of Thomas Hardy against Lina Wright Bevele's Criticism: With Special Reference to *Tess of the D'Urbervilles*” (『青山学院女子短期大学紀要』 No. 29, November, 1975) を参照。
- 47) George Wing, *Hardy* (Edinburgh and London, Oliver and Boyd, 1963) p. 68 & 70.
- 48) David Lodge, *Twentieth Century Interpretations of "Tess of the D'Urbervilles"* (ed. A. J. LaValley, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey, 1969), p. 82.
- 49) W. R. Rutland, *Thomas Hardy* (Basil Blackwell and Mott Ltd., Oxford, 1936) p. 237.
- 50) 48) 参照。
- 51) Irving Howe, *ibid.*, p. 65.
- 52) P. N. Furbank, 本論引用のテキスト。引用は Introduction, p. 20.
- 53) *TD*, lii. 414.
- 54) *TD*, xiv. 127.
- 55) *TD*, liii. 419.
- 56) J. R. Brooks, “The Move towards Existentialism,” *Thomas Hardy and the*

(18)

Modern World (ed. F. B. Pinion, The Thomas Hardy Society Ltd., Dorchester, Dorset, 1974) p. 48.